逸翁美術館 2015 秋季展
「秀吉の時代　―桃山美術の光と影」

出品目録

◎重要文化財

■第一章　桃山美術の光　―黄金・南蛮

1 花鳥図 対幅　(伝)狩野真笑
桃山時代 16 世紀

2◎豊臣秀吉像 画稿 (伝)狩野光信
桃山時代 16 世紀

3 利休伝書 三幅
桃山時代 16 世紀

4 南蛮渡来風俗図屏風 一隻 土佐派
江戸時代 17 世紀

5 法花蓮華文水指
明時代 17 世紀

6 砂張鉄鉢建水
朝鮮王朝 15 世紀

7 存星丸銘々盆
明時代 万暦 23 年(1595)

8 阿蘭陀手付酒壺
ネーデルラント(オランダ) 17 世紀

9 呂宋真壺
明時代 16 世紀

10 ハンネラ花入
(東南アジア) 17 世紀

11 秋草蒔絵螺鈿聖餅箱
桃山時代 16 世紀

12◎花鳥蒔絵螺鈿洋櫃 付 籐編外櫃
桃山時代 16 世紀

13 古赤絵籠絵七宝透香合
明時代 17 世紀

14 安南染付八角香合
後黎朝(ベトナム) 16～17 世紀

15 交趾黄鴨・萌黄鴨香合
明時代 17 世紀

16 宋胡録食籠小香合
アユタヤー王朝(タイ) 15～16 世紀

17 青貝内朱宝珠形香合
明時代 16～17 世紀

18 彩漆秀衡椀
桃山時代 16 世紀

19 根来朱箔絵蓋付片口
桃山時代 16 世紀

20 三島暦手徳利
朝鮮王朝 15～16 世紀

21 織部六角酒呑
桃山時代 16 世紀

■第二章　桃山美術の光　―かぶき・数寄

22 茶会記　片桐且元
桃山時代 天正 15 年(1587)

23 消息 前田利家宛　千利休
桃山時代 16 世紀

24 消息 松屋久政宛　古田織部
桃山時代 17 世紀

25 安楽庵策伝像 安楽庵賛　松花堂昭乗
江戸時代 17 世紀

26 隆達小唄　高三隆達
桃山時代 16～17 世紀

27◎三十三間堂通矢図屏風 一隻
江戸時代 17 世紀

28 黄瀬戸あやめ手砂金袋鉢
桃山時代 16 世紀

29 志野網干文水指
桃山時代 16 世紀

30 白天目宝珠茶入
室町～桃山時代 16 世紀

31 井戸茶碗 銘「きたむき」
朝鮮王朝 15 世紀

32 唐津奥高麗茶碗 銘「残雪」
桃山時代 16 世紀

33 萩福面割高台茶碗
江戸時代 17 世紀

34 海松貝片身替蒔絵手箱
江戸時代 17 世紀

35 団扇蒔絵大鼓胴
桃山時代 16 世紀

36 秋草蒔絵大手箱
桃山時代 16 世紀

37 秋草蒔絵二重箱
桃山時代 16 世紀

38 南蛮手付茶入 宗旦銘「いも」
(東南アジア) 16 世紀

39 糸目広口小茶入　(伝)加藤藤四郎
桃山時代 16 世紀

40 唐津大茶入 銘「阿闍梨」
桃山時代 16 世紀

41 織部茶器
桃山時代 17 世紀

42 織部四方蓋物
桃山時代 16 世紀

43 志野芦小禽文四方手鉢
桃山時代 16 世紀

44 鼠志野草文長方平鉢
江戸時代 17 世紀

45 黄瀬戸梅花文鉦鉢
桃山時代 16 世紀

46 志野柑子口花入
桃山時代 16世紀
47 黄瀬戸耳付花入
桃山時代 16世紀

■第三章 桃山美術の影 ―和敬清寂
48 三鷺図 (伝)呂紀
明時代 15～16世紀
49 払子画賛 春屋宗園
江戸～桃山時代 16～17世紀
50 墨蹟 七絶「乱後過崇福寺」 古溪宗陳
桃山時代 16世紀
51 枯木小禽図 天室賛 海北派
江戸時代 17世紀
52 消息 細川幽斎宛 千利休
桃山時代 16世紀
53 千少庵寿像 宗旦賛
江戸時代 17世紀
54 書蹟 一字「喝」 千宗旦
江戸時代 17世紀
55 瓢箪画 江月賛 松花堂昭乗
江戸時代 17世紀
56 達摩画賛 烏丸光広
江戸時代 17世紀
57 伊賀耳付胴締花入
桃山時代 16世紀
58 備前緋襷徳利花入
桃山時代 16世紀
59 古備前ラッキョウ形へこみ徳利花入
桃山時代 16世紀
60 朝鮮唐津耳付花入 銘「わびすけ」
桃山時代 16世紀
61 瓢炭斗 宗旦在判
江戸時代 17世紀
62 万字釜 辻与次郎
桃山時代 16世紀
63 備前種壺水指
桃山時代 16世紀
64 伊賀胴締水指
桃山時代 16世紀
65 利休形黒大棗 宗旦在判
桃山時代 16世紀
66 黒中棗 宗旦在判
江戸時代 17世紀
67 黒小棗 宗旦在判 関宗長
江戸時代 17世紀
68 無地志野茶碗 (伝)宗旦銘「大古久頭巾」
桃山時代 16世紀
69 瀬戸黒茶碗 銘「えぼし」
桃山時代 16世紀
70 赤樂茶碗 銘「常盤」樂長次郎
桃山時代 16世紀
71 黒樂茶碗 銘「千鳥」樂長次郎
桃山時代 16世紀
72 黒樂茶碗 銘「老楽」田中宗味
桃山時代 16世紀
73 黄瀬戸堀ノ手伯庵茶碗
桃山時代 16世紀
74 秋草蒔絵平茶器
桃山時代 16世紀
75 共筒茶杓 銘「轍」 山上宗二
桃山時代 16世紀
76 共筒茶杓 銘「一葉」津田宗及
桃山時代 16世紀
77 共筒茶杓 銘「長刀」古田織部
桃山時代 16世紀
78 黒織部沓茶碗 銘「北海」
桃山時代 16世紀
79 茶杓 千利休
桃山時代 16世紀
80 共筒茶杓 甫竹
桃山時代 16世紀
81 茶杓 千少庵
江戸時代 17世紀
82 共筒茶杓 銘「一筋」千宗旦
江戸時代 17世紀
83 共筒茶杓 僖首座
江戸時代 17世紀
84 竹一重切花入 千利休
桃山時代 16世紀
85 竹尺八筒花入 銘「祝儀」 千宗旦
江戸時代 17世紀

■第四章 光と影とを ―光悦・宗達
86 新古今集切 月二首「月だにも」「さむしろや」
本阿弥光悦、俵屋宗達下絵
江戸時代 17世紀
87 香炉釉茶碗 銘「白象」 樂常慶
江戸時代 17世紀
88 黒茶碗 本阿弥光悦
江戸時代 17世紀
89 薄蒔絵棚
江戸時代 17世紀

作者略解　　五十音順

海北派カイホウハ
桃山時代の海北友松ユウショウを始祖とする漢画系の画派。友松は浅井家家臣の武人であるが、50歳代より本格的作画活動に入った。狩野派や宋元画を学んで、独自の画境を開いた。桃山時代・江戸初期には、狩野・土佐・長谷川各派と並んで、画界の主要な位置を占めた。

片桐且元カタギリカツモト（1556-1615）
父は浅井氏家臣の片桐直貞ナオサダ。秀吉と対立した柴田勝家との戦いで、福島正則や加藤清正らと共に活躍し、賤ヶ岳の七本槍の一人に数えられた。関ヶ原の戦い以降、家康に協力的な立場で豊臣秀頼に仕える。甥の片桐貞昌サダマサ（石州セキシュウ）は徳川家綱の茶華道指南役、石州流茶華道の流祖。

加藤藤四郎カトウトウシロウ（1168-1249）
鎌倉時代前期の陶工で、名は景正カゲマサ。通称四郎左衛門シロウザエモン略して藤四郎トウシロウとも。号は春慶シュンケイ。瀬戸・美濃陶の開祖として語り継がれる伝説的人物。その実像については不明な点が多い。以降、代々藤四郎を名乗り、茶入の文様などによって「柳藤四郎」「花藤四郎」などと呼ばれる。

狩野真笑カノウシンショウ（生没年不詳）
戦国～桃山時代の画師。狩野元信モトノブの次男「乗信秀頼ヒデヨリ」の子「真笑秀政」とされるが、その人物像については詳らかでない。

狩野光信カノウミツノブ（1565-1608）
初め父の永徳とともに信長の安土城の障壁画を描く。後に秀吉の肥前国名古屋城や、2代将軍徳川秀忠の邸宅などの障壁画を描く。永徳の豪壮な様式ではなく、大和絵を取り入れながら、自然な奥行のある構成や繊細な形の樹木・金雲を用いた。

烏丸光広カラスマルミツヒロ（1579-1638）
公卿。歌道・書画・茶道には堪能で、1606年に参議に任ぜられた後、権大納言に至る。歌道を細川幽斎ホソカワユウサイから古今伝授を受け、禅道は沢庵らに学び、烏有子と号した。歌学書『耳底記』『関東道の記』の著書の他、多くの書跡を遺す。

僖首座キシュソ（1616-96）
臨済宗の僧。京都龍安寺リョウアンジの塔頭タッチュウ大珠院ダイジュインの住職。茶の湯は千宗旦の門人で、茶杓の制作で知られた。号は不遠庵フオンアン。龍安寺に好みの茶室「蔵六庵ゾウロクアン」が遺る。

江月宗玩コウゲツソウガン（1574-1643）
臨済宗の僧。堺の豪商、津田宗及の子。春屋宗園に師事し、大徳寺156世住持となる。1612年、孤篷庵コホウアンを創建。文化人として、小堀遠州・松花堂昭乗や狩野探幽らと親交。書は筆致が強く禅機にあふれ、沢庵宗彭タクアンソウホウと並び称される。

古溪宗陳コケイソウチン（1532-97）
臨済宗大徳寺117世住持で、号は蒲庵ホアン。千利休と親交し、1591年、利休の木像が大徳寺三門に祀られていた事件の責任をとらされる。立腹した秀吉が大徳寺の破却を試みると、古溪は使者の前に立ちはだかり短刀で命を絶とうとしたため、秀吉は慌てて使者を引き上げさせたという。

春屋宗園シュンオクソウエン（1529-1611）
臨済宗の僧。大徳寺の笑嶺宗訢ショウレイソウキンらに師事し、住持となる。塔頭タッチュウ三玄院サンゲンイン・龍光院リュウコウイン開山。津田宗及・今井宗久・千利休らと親交。利休の孫宗旦を弟子とする。後陽成天皇より、大宝円鑑国師号を特賜される。

松花堂昭乗ショウカドウショウジョウ（1584-1639）
学僧で書画家。惺々翁ショウジョウオウ・滝本坊タキモトボウの号を持つ。寛永の三筆の一人。絵を狩野山楽サンラクに学び、詩歌・書画にその才を示した。茶の湯は小堀遠州などとの交流を楽しみ、晩年、男山に庵室松花堂を建てて住んだ。

関宗長セキソウチョウ（生没年不詳）
江戸初期の漆工、号は法寸斎。千宗旦の塗師として、寛永年間（1624-44）頃に活躍したという。父の宗蓮と共に紹鷗棗を研究。器物に銘を遺すのに、刻み付ける替わりに、漆で記す方法を始めた。

千少庵センショウアン（1546-1614）
利休の養嗣子で、千家2世。利休の娘、亀を娶り、母の宗恩が利休と再婚し、千家に入る。大徳寺門前に屋敷を構え、利休の茶を広めた。利休切腹後は、蒲生氏郷ガモウウジサトを頼って会津若松に流寓。後、家康らのとりなしで許され「不審庵フシンアン」を再興した。

千宗旦センソウタン（1578-1658）
千少庵の子、千家3世。元伯宗旦と称す。大徳寺の春屋宗園に参禅。1600年頃、家督を継ぎ、千家中興の祖となる。侘び茶に徹し、仕官しなかったために生活は困窮し「乞食宗旦」とも呼ばれた。1646年、今日庵コンニチアンを建てて隠居。

千利休センノリキュウ（1522-91）
侘び茶の完成者。今井宗久イマイソウキュウ・津田宗及と共に茶湯の天下三宗匠と称せられ、「利休七哲」に代表される数多くの弟子を抱えた。1587年の北野大茶湯を主管するなど、秀吉の重い信任を受けて「御茶湯御政道」の上で大名達に影響力を持った。

高三隆達タカサブリュウタツ（生没年不詳）
連歌・声曲・書画などに秀で、当時流行していた小唄を集め、自ら作詞・作曲を行い独特な声調の隆達節を大成した。文禄より慶長年間に名を盛んにし、伏見城の能舞台で細川幽斎の鼓に合わせて小唄を歌い、秀吉に喜ばれたという。

田中宗味タナカソウミ（生没年不詳）
本名は庄左衛門、号を宗味という。樂家2代吉左衛門常慶の兄。父の田中宗慶ソウケイが、秀吉から聚楽第の一字を取った「樂」の金印を賜り、これが樂家の始まりとなる。宗慶・宗味は長次郎の制作活動に深く関わった。樂宗入ラクソウニュウが記した『宗入文書』によると、宗味の娘が初代長次郎の嫁となっている。

俵屋宗達タワラヤソウタツ（生没年不詳）
俵屋という絵画工房を率い、扇絵の他、屏風絵や料紙の下絵装飾を扱う。当代一流の文化人であった烏丸光広や本阿弥光悦らの書巻に下絵を描き、また千少庵を茶の湯に招くなどの交流があった。

津田宗及ツダソウキュウ（?-1591）
堺南荘の豪商、天王寺屋に生まれる。秀吉の信頼を得て茶湯者八人衆の一人として数えられ、今井宗久・千利休とともに3000石の知行を与えられた。

辻与次郎ツジヨジロウ（生没年不詳）
近江栗太郡辻村（現滋賀県栗東市辻）に生まれ、京釜の創始者西村道仁ニシムラドウニンに師事した。利休好みの新しい形・文様・肌合の釜を創始し、秀吉にも認められて「天下一」の称号を許された。

土佐派トサハ
14世紀南北朝時代の藤原行光フジワラユキミツを祖として朝廷の絵所を世襲し、大和絵の伝統を守った。応仁の乱以降、派の勢いは減速し、桃山時代、土佐光吉ミツヨシは堺に拠点を移す。江戸時代、光則ミツノリ・光起ミツオキが京都に戻り、流派が再興された。

古田織部フルタオリベ（1544-1615）
父の重定と共に初め信長に仕えたが、後、秀吉に仕え、従五位下織部正となった。小堀遠州を始め、多くの大名たちの指導にあたり、大名茶を確立する一方、やきものや茶室にも新たな創意を加えた。

甫竹ホチク（生没年不詳）
和泉の人。利休の時代、慶首座ケイシュソが利休の茶杓の下削りを行い、中節の茶杓が出現した。慶首座の弟子である甫竹は利休の茶杓師として中節の茶杓を確立した。後、古田織部に引き立てられ、徳川秀忠にたびたび茶杓を献上した。

本阿弥光悦ホンアミコウエツ（1558-1637）
書は寛永の三筆の一人として称され、陶芸では常慶に習った楽焼の茶碗、漆芸では装飾的な図柄の硯箱などが知られる。1615年、洛北鷹峯に芸術村（光悦村）を築いた。

山上宗二ヤマノウエソウジ（1544-90）
堺の豪商（町衆）屋号は薩摩屋。号は瓢庵。利休に20年間茶の湯を学ぶ。茶匠として秀吉に仕えたが、後に怒りを買い、小田原に下って北条氏に身を寄せた。著書『山上宗二記』は茶道史の基本史料。

樂常慶ラクジョウケイ（1561-1635）
初代長次郎を補佐した、田中宗慶の次男。庄左衛門宗味は兄。吉左衛門常慶が樂家2代を継ぎ、吉左衛門の名を代々が襲名する。古田織部の影響を受け、大ぶりで歪みのある造形が特徴。

樂長次郎ラクチョウジロウ（?-1589）
樂焼樂家の初代。後に樂宗入が記した『宗入文書』によると、妻に田中宗慶の孫娘を迎え、宗慶や宗味・常慶らと工房を構えたという。天正年間に宗慶を介し、利休と知り合ったと推定される。

呂紀リョキ（生没年不詳）
中国、明代の画家。浙江省寧波ニンポーの人。花鳥画に意を得て、鮮麗な賦彩、細緻な描写を特色とする装飾的な画風をなした。弘治年間(1488-1505)宮廷に召され、画院で仕事をした。